

二〇一〇年十二月 山陰研究 第三号 抜刷  
島根大学法文学部 山陰研究センター

## 森為泰の五十賀詠歌

芦田耕一

## 森為泰の五十賀詠歌

芦田 耕一

(島根大学法文学部)

### 摘要

本稿で紹介する森為泰（一八一一～一八七五年）は松江藩士であり、国学者として著名であるが、為泰の五十歳を祝って算賀の歌が詠まれた。これを諸歌集から収集することにより当時の出雲歌壇の様相を知ることができる。

キーワード・森為泰、五十算賀の歌、幕末の出雲歌壇

### 解説

本稿は松江藩士で国学者の森為泰の五十算賀の歌を諸歌集から収集したものであり、幕末の出雲歌壇の様相を知る貴重な資料となるので、ここに紹介しておきたい。

為泰の五十算賀はいつ行なわれたのであろうか。為泰は文化八年（一八一）に生まれ、明治八年（一八七五）に没しているため、万延元年（一八六〇）に五十歳である。刈谷市中央図書館の村上文庫に蔵されている「為泰詠草」に「文久四年壬二月玉藻三編料為泰詠草」が収められている。これには為泰が五十一歳の今年である文久元年（一八六一）の十一月二日に催行された五十歳の算賀の歌会詠がある（「玉藻

集料詠草」とする。以下「詠草」。これに拠れば、同じ年の春に為泰は「老の波五十の春によせてけりうきつしつみつよを渡るまに」と詠むが、五十歳の去年に病気をしたゆえにこの歌が詠まれたとし、序文の筆者足羽美生は子息の永雅とあい計らって快癒を機に賀歌を募集したところ全国から応募があった。これをこのままにするのは忍びないので、「寄出雲名所祝」「寄竹祝」の兼題で「冬至会」として、為泰の家に参集して算賀の歌会を催したという。

つまり、算賀は実際は五十一歳で行なわれたということになる。次におのおの歌集を簡単に説明していこう。

まず、『三熊野集』である。紀伊国の西田惟恒の編になる。「寄竹祝」の二首のみで、作者はともに姓は竹村、伊豆国熊坂の人である。これ

らの歌は他に見られない。安政五年（一八五八）正月の序文がある。刊年は不明であるが、文久元年以降である。

『万延元年六百首』は同じく惟恒の編。「寄竹祝」の二首のみで、作者の微典は紀伊国藩士、行忠は紀伊国和歌山の人である。これらの歌は他に見られない。序文はあるが、年時は記載されていない。

『文久元年七百首』は同じく惟恒の編。「寄出雲国名所祝」は二首、作者の豊水は肥後国藩士、和種は紀伊国の人である。「寄竹祝」は四首、善水、繁蔭、好孝はいずれも紀伊国、彝倫は阿波国の人である。これらの歌は他に見られない。序文に「文久と改れる年の夏五十君夷守ぬしのおくらる、書のたよりにつけて」「文久元年七百首のなれるを見て」とあるが、刊年は不明。

『文久二年八百首』は同じく惟恒の編。「寄出雲国名所祝」は六二首（為泰自身の歌を除いて）、作者は不明な者もいるが、ほとんどが出雲国の人である。歌人は「詠草」より少ないが、すべてこれに見られる。ただし、歌は異なる。「寄竹祝」は二首、利亮は三河国の人であり、和種は前出。これらの歌は他に見られない。序文は「文久二とせといふ三月はかり」、「かくいふは文久二とせといふ年の五月」、「文久二年八百首のなれるを見て」とあるが、刊年は不明。

『元治元年千首』は三河国の村上忠順の編。「寄竹祝」は一首のみ、作者の隠岐国造の歌は他に見られない。「寄出雲名所祝」は二三首、すべて「詠草」と同じ歌であり、ここから採り入れたのであろう。作者は出雲国の人である。刊年は、元治元年（一八六四）より随分遅くなり、明治七年（一八七四）であったという（中澤伸弘『徳川時代後期出雲歌壇と國學』）。

『類題和歌玉藻集』二編は村上忠順の編。一番歌は参考のために挙げ

ておいた。2番歌の「竹によせて」が「寄竹祝」に該当しよう。作者は記されていないが、1番歌の「倭文字」と同じと思しく、「詠草」に見える「太田倭文字」である。松江藩士太田監物女、千家尊孫の孫で、女流歌人として著名である。刊年は、忠順自筆の「玉藻集記」に拠れば慶応元年（一八六五）三月となる。

以上、歌集を概観してきたが、「詠草」との関係で言えば、これに見られない歌があり、同歌題で同歌人が二首詠んでいる、また他国人の歌があるなど、実に厄介な問題をはらんでいる。推測するに、「寄出雲国名所祝」「寄竹祝」の両題で、五十歳を迎える万延元年以前にあらじめ全国に募集することがあったのではないか。そして快癒後の文久元年にも同題で募集し、さらに出雲国の門人たちにも同様に兼題で詠ませて歌会を催行したというのではなかったか。

最後に、「詠草」のことを簡単に説明しよう。

足羽美生の手になる序文のことは前述したが、作者はいずれも為泰の出雲国の門弟たちであり、神官、松江藩士、およびその妻子が大部分である。一月二日の歌会への参加如何にかかわらず出詠しており、一四〇人にも及ぶ勢いである。『国学者伝記集成』に「門人二百人に余れり」とするのも納得される。両題に出詠する作者がほとんどで、作者の配列順も同じである。

当日の参加者は、当座でも詠んでおり、これが「賀会日当座詠」である。出席者は為泰を除いて二二名である。不参加者も歌をよせており、「賀日不逢而詠当座代人々」とする二八名である。歌題をわりあてて詠ませたのであろうか。当然のことながら、両方に出詠する人はいない。

「詠草」は「玉藻三編料」とあるが、実は『類題和歌玉藻集』には入

集していない。この初編は二編と同じく忠順の編で、忠順自筆の「玉藻集記」に拠れば、刊年は文久三年二月である。二編は慶応元年の刊。いずれも文久元年の五十算賀の歌会後に刊行されているので、これらに採られてもよいはずであるのに、そうでないのは文字通り「三編料」の詠歌であったためと思われる。三編は刊行されなかったようである。

## 翻 刻

### 〔翻 刻 凡 例〕

- 一 本文の翻刻に際しては、底本の本文を可能な限り尊重するべく漢字と仮名の別、送り仮名、仮名遣い等はすべて底本のままとした。ただし、歌の書式は、標題、歌、作者名が一行書きになっているが、これに従わず、わかりやすいような形式にした。また、歌題ごとに歌頭に通し番号を付しておいた。
- 二 漢字は新字体を用い、俗字、異体字は原則として通行の活字体を用いた。誤字と思われるものでもそのままにしているものもある。
- 三 本文に疑問等がある場合は、右傍に（ママ）と注記した。
- 四 判読不能な箇所は□で示した。
- 五 「玉藻集料詠草」（仮題）において、補入、傍書、見せ消し等は、明記していないが、朱である。
- 六 翻刻者が、注として付す箇所がある。
- 七 翻刻をお許しいただいた刈谷市中央図書館に感謝する。

### 〔翻 刻〕

#### 一 『三熊野集』

森為泰の五十賀詠歌（芦田耕一）

森為泰ぬしの五十賀に寄竹祝

茂枝

1 うきふしもなつ冬しらて君こそはちひろある竹のかけにすむらむ

茂正

2 千代までもうきふししらぬ我友はこの君とこそ竹も見ゆるらめ

#### 二 『万延元年六百首』

千竹園為泰翁の五十賀に寄竹祝

亀井微典

1 万代もへむ若竹をうつし植て君かみつゑにさ、けまつらん

稲垣行忠

2 おひしける軒はの竹のふしことになかきよはひもこもるなりけり

#### 三 『文久元年七百首』

千竹園為泰ぬしの五十賀に寄出雲国名所祝を

佐々豊水

1 神さふることひき山の塩味葛なかきは君かよはひなるらん

塩路和種

2 春と秋おいせぬ山のおもとにて花もみちもをりかさ、まし

おなしとき寄竹祝といふことを（注、2番歌の次にある）

瀬見善水

1 かはたけのおきふしことにさかえゆく末のちとせは君そ見るらん

榎本繁蔭

2 かはらしな生そふ竹の数ことに千代をこめたる君か行すゑ

松井好孝

3 いろかへて五十のとしもくれ竹の猶幾千代の春かへぬらん

橋本彝倫

4 やとりつる葉わけの月のかけにしもつゆ秋しらぬ千代のくれ竹

四 『文久二年八百首』

千竹園為泰ぬしの五十賀に寄出雲国名所祝といふことを

藤原古徳女

1 高からむ君かよはひにくらへなはふもとならましふしきみの嵩

斎藤敬

2 むれきつ、鶴もかめ田の山しめてこ、そよもきか島とすむらん

神谷正治

3 出雲山のほる朝日に柳葉のさかゆく君かひかりをそ見る

高橋真全

4 よろつ代の亀田の山のみさかえにあへる君こそたのしからまし

乙部真樹

5 なからへてゆくへはるかに見ゆるかな君かちせをかけはしの滝

棚橋正朝

6 千代ふへき所はこ、となれきつ、なくか稲田の森のあしたつ

間瀬愛敬

7 天地とともにさかえて出雲川つきぬや御代のためしなるらん

坂田百年

8 山の名の見るに妙なる桃の花君か三千代の色香ならまし

須佐国造建敏

9 幾千代もつきぬためしや素鷲川に生る真菅のねさしなるらん

朝比奈武敏

10 五十年の君はちとせの坂の浦千重なみかけてこえぬへきかな

桜井忠恕

11 苔ふかき真名井の清水千代かけてくむとも尽し君かよはひは

松井言正

12 千代となく雲井の鶴の羽黒山高くつもらせ君かよはひも

坂田当義

13 出雲かた袖師の浦による波も君か八千代をかけてこそたて

樋野重成

14 万代に君をまもらせ鶴亀の山もてよろふ日隅の大みや

太田倭文女

15 長江山なからへて見よちとせへていろ／＼松の花はさくやと

今村久良女

16 神代よりたてる鶴山かめ山の高さや君かよはひなるらん

須佐建真

17 おもしろく月日なかれて万代にすみやわたらん須佐の山川

内田保光

18 山の名の亀にたくへていはふかな高ねにしける森のこすゑを

小川友保

19 君か名はよにいやひろく高瀬川なけれ立まし万代までに

木村方知

20 神のます出雲のもりの名におへる君かさかえもときはなるへし

梶田季寛

21 あふき見る八雲の山は万代も神よなからにうこさならまし

枝本重久

22 さ、れ石のなりてこけむす磐門山動くへしやは君かよはひも

23 長柄山君なからへてなかむらん高峰の松の十かへりの花  
内藤益雄

北島孝郷

24 君かためなかれて千代をゆつりはの滝津河内はよとむ瀬もなし

北島民女

25 鶴にのり亀にのりてもあそはなむ千代まつ島に君はそなれて

足羽美生

26 わかをちの高きよはひのためしには老せぬ山をひくへかりけり

吉見吉雄

27 くりかへしつきぬなかれをゆつりはの滝のいとこそ君にとはよれ

藤江千元

28 万代をしらへぬ日こそなかりけれ亀の小島の松かせのこゑ

外山正樹

29 まれにさく松笠山の花かつらちとせをかけて君かかさゝん

三上吉利

30 君か代はつきせさらまし出雲なる火きりの滝はもえかへるとも

仙田陣斯

31 佐姫山神代のかしに動きなき君かよはひはかけてひかまし

広瀬延孝

32 出雲濁その、長浜なかしとて君かよはひにひくへくもあらず

氏家正息

33 なく声に君かよはひはしられけり千代もこゆへき坂のうら鶴

野間朗衡

34 うるはしく立る亀田の山松に君かちとせのいろそこもれる

井原篤之

35 つるかめの山もさすかにうらやまむつこくことなき君かよはひを

井山公敬

36 鶯の谷の梢の藤かつら君かちとせの春やむすへる

武田常彬

37 出雲なる船岡山にあまるまで君かよはひをつませてしかな

足高種成

38 千代までもてらせ出雲の鏡石むかふるけさへおもかはりせず

土岐国彦

39 あふきつ、出雲の森のかけとはん千人やち人千世にしけらん

高橋正蔵

40 名にしおふ出雲のもりのことのはの花そ常盤に咲にははまし

服部薫樹

41 くれ竹のさ、ふの森のみしめ縄かけていのらん君かちとせを

田中豊秋

42 万代の友とあふきて君ぞ見ん雲ゑに高きふしきみの山

小川恭義

43 山の名の亀のを長くよにませといのるは君かよはひなりけり

竹内修智

44 さかえつ、たてる御島の岩ね松なほ八千とせもいろはかはらし

柘植正常

45 君か代はみしまの松とさかえなん幾とし浪は立かへるとも

小田柔嘉

46 神代よりかはらす立る御しまなる松こそ君か千代の友なれ

佐野則孝

47 君か代ははるけかるらんをの瀬なるみしまの松とともにさかえて

48 君か代は神にちかひを懸はしの滝のみなせとつきせさらまし  
山口広孝

49 くもりなき秋の月山春は花のとかに見つ、君は千代へよ  
桂田元生

50 万代のためしにひかむ加賀の浦の山にありてふたきの白いと  
野間徳教

51 いつもかた千酌の浜にくむ塩のくむとつきし君かよはひは  
吉塚景命

52 百日山君か五十の花のうへに千代みのるへきためしをそ見る  
通伝寺九鳥

53 見わたせは八重にさやけし月山の月もちとせの秋をてらして  
田川義静

54 千代になほかくてすむへく見ゆるかな君か心の玉つくり川  
大塚孝徳

55 かめ田山高ねに生る玉松のよはひを君は幾世かさねん  
渡辺節

56 にこりなき世になからへて安田川やすくも君はすみわたらまし  
枝本滋栄

57 君か代はし、ちの海のなみの花幾春かけてさかんとすらん  
青柳惟雄

58 松江川つきぬし、みをかきよせて君かちとせの数にひろはん  
吉塚鷹女

59 千代へなは君かかしらもしらか山高峰の雪といくへつもらん  
段塚千代女  
内藤高行

60 鶴がなく松江の海による浪のよむとつきし君かよはひも  
森永雅

61 天かける大鳥川を見わたせは君か千とせのなみそたちける  
森時女

62 くれ竹の千代もやちよも八雲たつ出雲のもりの君はかはらし  
おなしこ、ろを

63 出雲なる亀田の山の万代はやほに杵築の神にまかせん  
森為泰

おなしとき寄竹祝といふことを（注、63番歌の次にある）  
酒井利亮

1 としのはにおひそはりつ、園の竹いくちもとにかならんとすらん  
塩路和種

2 百とせのなかはは竹の葉わけにてよななき千代をふしにこめけり

五 『元治元年千首』

千竹園為泰五十賀に寄竹祝といふことを

隠岐国造有尚

1 いくちよも立さかゆへき此君と竹さへ君かかけをたのまむ  
同しとき寄出雲名所祝といふ事を（注、1番歌の次にある）

1 老すてふ山は千とせの春秋をかけてかよはせ花にもみちに  
斎藤敬

2 くれ竹のさ、ふの森の色にあえて千代もかはらし君か行末  
太田倭文字

3 雲井とふたつのはね坂こえて行君かよはひやたかくらの山  
吉見吉雄

須佐国子

4 大須佐田小すきたかけて君か代のたのみおほかる秋のゆたけさ

北島孝卿（郷か）

5 むれわたるつるのほかせに亀田山城への松も千代よはふなり

北島民子

6 八束穂のたりほの千秋かさぬらむ君かみとしの稲園のさと

野間朗衡

7 ことのはの花にあそひて安来山やすくも千代の春にあへ君

服部良平

8 みつよりの縄うちかけて君か代のためしにひかむ園のまつ山

木村方知

9 ゆく末の千代を松江にすみ馴て君は嬉しきよをわたるらむ

小川友保

10 万代もなからへませと亀か測なくそいのる君かよはひを

渡辺節

11 白かしの磯わはるかによる浪のかすもしられぬ君かよはひか

前田正雄

12 君かつむ千代のすかたもあらはれて鏡の山にみえわたるかな

釈教好

13 錦のみ波まにひろふこと玉の光あらそふ君かよとかな

釈素兮

14 あふきみるつるとかめとの山よりも高きよはひを君はつまなむ

神谷富義

15 神代よりなかれつきせぬ出雲河ゆく末とほきためしなりけり

勝野（勝部か）敬勝

16 ちりうせぬためしをみせて勝間山神代の松も君を守らむ

高梨延宣

17 あふきみる鳥上山のみねよりも猶高からし君かよはひは

寺田敬典

18 打わたす松江のはしに君か代の長きためしをかけてこそみれ

村上師前

19 八雲たつ出雲の杜はことのはの千枝にさかくかけとこそみれ

須佐福重

20 君かみる千とせの山のさくら花いく春かけて咲にほふらむ

秦富門

21 ひの川にあそへる亀は神代より万代かけてすみわたるらむ

吉見豊子

22 是そこの君かよはひの長見川つきぬなかれをわれもくま、し

松林松子

23 いつもなる袖師の浦の友ちとり君を千代とは鳴わたるなり

六 『類題和歌玉藻集』二編下

千竹園五十歳の春老の波五十の春によせてけりうきつしつみつ世をわたるまにとよまれしよし聞て

倭文字

1 君か身によせし五十のおいの波なほたちかへれ千重に八千重に又竹によせて

2 いくたひもかそへてを見むくれ竹の一ふしことにこもる八千代を

七 「玉藻集料詠草」(仮題)

千竹園の翁今年文久元年酉春立ける日老の波五十の春によせてけり  
うきつしつみつよを渡るまにと詠給ひしは去年さらぬ事ありていた  
つき給ひし事有し故成へしと押はからるれば永雅とはかりていまよ  
りは事あらたまりていみ竹の幾千代もくれ竹のよに立榮え給ふへく  
四方の君たちに賀言乞てと夢のねのねもころに思ふよし便りをもと  
めてこ、かしこに乞やり置しかは夏過秋もや更行ころほひ近きあた  
りはさら也雲井なす遠き国々の風流君たちさへ聞伝へつ、はろ／＼  
と送り来れるかこ、らつとへりけりか、るをそのをしへ子としてよ  
そに見過すへきならねはと思ふとちあらかしめ寄出雲名所祝寄竹祝  
を冬至会の兼題と定めて十一月二十一日翁の家につとひて人丸神靈  
に詠て備へ奉れるをかいつめて此一巻とせるになむ

寄出雲名所祝

あすはの美生

大橋古徳子

- 1 出雲潟とはに立寄白波を君か齡ひの有かすにとれ  
小田綱子
- 2 亀田山高ねの松の万代も君は榮えて見るへかりけり  
斎藤敬
- 3 老<sup>マ</sup>すてふ山は千年の春秋を懸てかよはせ花に紅葉に  
神谷正治
- 4 大神の恵みも広き鳥居田の稲葉の露や君か代の数  
乙部真樹
- 5 常盤なる松江に渡す大橋は君か千年をかくる也けり  
間瀬愛敬

- 6 千年山君か齡にひかれきて鳴か高ねのあしたつの声  
高橋真全
- 7 亀崎の松のしつえに鳴たつの声にもしるし君か八千代は  
村松喜恵子
- 8 君か代は榮え行へし出雲川かくて流れの尽ぬ限りは  
棚橋末子
- 9 千代<sup>マ</sup>かけて君そ結はむ松笠の滝の白糸練かへしつ、  
坂田百年
- 10 君か代の光りならまし三千年に花咲桃のその、なかはま  
小田切尚行
- 11 出雲山高ねの松に君か代をちよと鳴たつ声のはるけさ  
小田切八重子
- 12 鶴島をさして漕船君か代の千年をのせて行かと思ふ  
三谷鹿子
- 13 亀山の二葉の松の行末と君か齡は尽せさらまし  
棚橋正朝
- 14 富田川や水底清くすむ月は君か千年の鏡也けり  
大野泰仲
- 15 出雲のや園の長浜長けれと君齡<sup>(ママ)</sup>にしかしとそおもふ  
須佐建敏
- 16 八重垣の神の恵みに言のはの道はさかえむ世に限りなく  
小田切増子
- 17 長柄山尾の上の松の十かへりの花咲春も君はみるへき  
小田切文登子
- 18 千代かけて波のあやおる浦の名の錦は君かみ布也けり

太田倭文子

19 呉竹のさゝふの森の色にあえて千代もかはらし君か行末

土屋景研

20 君か代は行末遠き亀山の松の十かへり花の咲まで

種野重成

21 千代の夢君や結はん花紅葉見にとてかよふ枕木の山

朝比奈武敏

22 底にすむ亀もつかひて万代の齢を君にゆつりはの滝

小田切忠好

23 万世も君はかはらし又おへる亀田の山の松にあえつゝ

松井言正

24 君かみむ雪花のみつよりの千代の縄手やその、長浜

足羽美生

25 年毎に君かかさせる桜崎さきくて千代の春に逢まし

藤江千元

26 万代の秋を結びて匂ふ也月見の岡の八千草の露

吉見吉雄

27 雲井飛たつのはね坂越て行君かよはひや高倉の山

三上吉利

28 年毎に生つく松の子負島君か千年のためしにそ引

仙田陣斯

29 御杖立おえとのらし、億宇の森神代なからに栄えさらめや

中村久慶

30 むす苔の常なめさ山とこなめにいませと君を祈る神垣

須佐建真

31 千代かけて出雲八重垣かきつめし君か言葉の花そ匂はん

須佐国子

32 大須佐田小すきた懸て君か代のたのみおほかる秋のゆたけさ

北島孝郷

33 むれわたるたつの羽風に亀田山城の辺の松も千代よはふ也

北島民子

34 八束穂の秀穂たりの千秋かさぬらん君かみとしの稲岡の里

外山正樹

35 香くはしき立花山のかけとへは君か千年をしめ野也けり

内藤益雄

36 神さひし鳥上山の塩味かつら万代懸て君をいのらん

高橋正蔵

37 限りなき君か吉事やつゝむらんよにも名高き袋石には

足高種成

38 簸の川の流れや君か行末の長き齢のためし成らん

小川恭義

39 常盤なる松江にすめる君なれば必千代もかきは成へし

井原篤之

40 万代と君にや契る測のなにおへりといへる亀も齢を

土岐国彦

41 いそきたは籠也けり雲見坂猶いほきたも立のほらなん

野間朗衡

42 言の葉の花にあそひて安来山やすくも千代の春にあへ君

広瀬延孝

43 限りなきよの行末は久方の日隅の宮の神そしるらん

- 44 千代の波八千代を懸て安田川流れ行へくみと渡る哉  
氏家正息 大塚孝徳
- 45 ちよ懸てむすふ鏡の池水にくもらぬ君か心をそみる  
武田常彬
- 46 契りおけ手間の関山千代ふともへたて、老の波はこえしと  
田中豊秋
- 47 万代もかはらぬ君かためしには老せぬ山を行へかりけり  
桂田元生
- 48 千代かけて若かへるへき君かみの老をへたてよ手間の関山  
林年林
- 49 君か代は富て榮て船山にこかね白かねつみあまるまで  
陶山雅純
- 50 神のます出雲の国の御やしろの数にもしるし君か榮えは  
余村正甫
- 51 色かへぬ青垣山を姿にて君はましませ万代までに  
岡田豊年
- 52 亀か渕水のみとりの色ならてふかくそみゆる君か万代  
杉岡富頼
- 53 ときはなる松江の浦にゐるたつよおのか八千代に君もともなへ  
野間徳教
- 54 いかさまに榮え行まし山の名の八重に生たつまつの梢は  
服部良平
- 55 みつよりの縄打懸て君か代のためしに引ん園の松山  
井山公敬
- 56 松崎の板井の水のこほれるは君か千年を給ふ也けり  
吉塚景命
- 57 八束穂の稲田の森のいや高くつめとこそ思へ君かよはひも  
桜井忠恕
- 58 ちいほ秋かけて齢もいや高く君そつむへき稲積の山  
枝本重久
- 59 さす竹の君か齢のたねの滝みよ尽もせし千代に流れて  
青柳惟雄
- 60 我思ふ君か齢は長柄山高ねの松に花のさくまで  
内田保光
- 61 敷島の道よにさとし教ふへき君を守らせ八重垣の神  
木村方知
- 62 行末の千代を松江に住馴て君は嬉しき世を渡るらん  
小川友保
- 63 万代もなからへませと亀か渕ふかくそいのる君か齢を  
中村尚章
- 64 くりかへし君は千年を松笠の滝の白糸懸て経ぬへし  
梶田季寛
- 65 くもりなき君か榮えを朝日山のほるひかりに懸て見るかな  
堀江忠教
- 66 砥神山ふもとの海に寄波と君か齢ひも尽せさらなむ  
坂田当義
- 67 朝日さす和田の御崎にゐるたつも君か齢を千代と鳴也  
三上吉武
- 68 千代ふへき竹の齢のためしには出雲の山の松や引まし

- 69 おのかよを君にさ、くと山のなの鶴の毛衣きては鳴らん  
深津矩豊  
井上武昌
- 70 長らへて君は言葉の道にたつ其名や千代にと、ろきの瀨  
落合一業
- 71 天雲は立日た、ぬ日朝日山出るひかりは千代にくもらし  
内部寛郷
- 72 君か代は豊榮のほる朝日山高き齡をつますへき哉  
入江勝延
- 73 言の葉の道の榮えも君か世も須賀の神垣あらんかきりは  
青木存重
- 74 君か代は老せぬ山のやま松とともに榮えてときはならまし  
村上素誠
- 75 君か代は果も限りも白かたに立こそよせめ飢宇のうら浪  
江角式実
- 76 勝間山松の常盤に榮えつ、君も十かへり花の咲まで  
間瀬隣信
- 77 万代も経へき亀田の山松を君はかさして幾世榮えん  
枝本滋栄
- 78 かりをさめ八束たり穂と君かよといつれ高けん稲つみの山  
大輝義静
- 79 動きなき御代をそてらす鏡石千代の光りは君そみるへき  
田口広孝
- 80 出雲かた三穂の御崎のはてもなくよせてはかへれ君か年波  
真柄信順
- 81 秋鹿山清く流る、長江川長き世かけて君はすむらん  
渡部節
- 82 白かたの磯わはるかによる波の数しられぬは君かよなれや  
武熊栄雄
- 83 千代ふへく君か齡を懸橋の滝の白糸結び置まし  
定方忠教
- 84 出雲湯浜の真砂子を我翁の齡の数にとれとこそおもへ  
杉谷正信
- 85 さくさめの森に懸たるみしめ縄長くもかなと祈る君世  
鳥屋尾正永
- 86 八雲たつ出雲の森の真榭と榮行君かよは久しけん  
間瀬正静
- 87 唐衣錦の浦に寄波の数にもまさるよはひともかな  
丹羽雅義
- 88 ゆたかにも遊へる鶴の羽黒山はるかにみゆる君か千代哉  
須佐建業
- 89 さやかなる須佐の塩井の□月かけに君か八千代のかけそくまる、  
高畑智義
- 90 おいすして君なからへよ長柄山峰の小松の千年万代  
野間一玄
- 91 朝日山のほるかことき君か代の榮えはそらに顕はれてみゆ  
前田正雄
- 92 君か経む千代の姿も顕はれて鏡の山にみえわたるかな  
田村正時
- 93 千年山咲らむ松の十かへりの花も幾たひ君はみるへき

94 錦のみ波まにひろふ言玉の光り数そふ君かやとかな  
积教好

95 君か代はその、長浜かきりなき真砂の数をよみ尽すまで  
积恵俊

96 若かへる松江の浦の老の波千重に懸てや君なかむらむ  
积賢教

97 八千代経むためしは君かかしらにそおくしらかねに顕れにける  
积活兮

98 松竹の八千代を君か齡にて我すむ山の老せずもかな  
积浩兮

99 あふきみる鶴と亀との山よりも高き齡を君はつまなむ  
积素兮

100 山のなの月雪花を千代懸て行年毎に若かへり見よ  
积九鳥

101 吹風の音にも松の千年経て老せぬ山のしるしをそきく  
积無比

102 くもる時なければ君を世の人も千代の鏡の石とこそみれ  
积恵好

103 真帆引て船は出雲の浦安くわたるや君か千代の行末  
高梨官就

104 神代よりなけれ尽せぬ出雲川行末遠きためし也けり  
神谷富義

105 年毎に花はかはらす桜川流れて匂ふ千代の行末  
岡本一行

106 から衣袖しの浦に立波の花も千年の春かけてさけ  
勝部敬勝

107 散うせぬためしをみせて勝間山神よのまつも君をまもらん  
根岸古一

108 出雲なる鶴と亀との山松を君齡にたくへてそみる  
原義郷

109 めしてすむ君は松江の大橋に長き齡や懸わたすらん  
永井専隣

110 君かよはちよにうこかしたくわなる飯山石の里の神し守れば  
高梨延宣

111 あふきみる鳥上山の峰よりも猶高からし君齡かは  
寺田敬典

112 打渡す松江の橋に君か代の長きためしを懸てみるこそれ哉  
村上師前

113 八雲たつ出雲のもりは言の葉の千枝に榮行蔭と社みれ  
須佐晴敏

114 長閑なる錦の浦の朝霞波に立そふよろつよの春  
武田常德

115 千早振神の御代より尽すして流る、ものはそかの川水  
須佐福重

116 君か見る千年の山の桜花幾春かけてさきか句はむ  
武田朝春

117 幾千代も尽せさらまし大宮の塩井の水と君か齡は  
福田真久

118 大須佐田神の守りに幾秋か君か榮えも尽せさらまし

- 119 君かよの尽せぬ色は須賀川の清き流れに見えわたる哉 同計寛  
 秦富門
- 120 ひの川に遊へる亀は神代より万代懸てすみわたるらん 常松良里
- 121 ねきまつる須佐の宮居の大神の御徳と高き齡ともかな 藤江伊勢女
- 122 つくも髪しらかの山の峰の松千代に栄行色は見えけり 段塚千代女
- 123 世の中の人もあまたにしたひ山わけ見よ君か千代の古道 熊谷錠女
- 124 勝間山君か千年の色見えて老木の松も若枝さしけり 吉城多喜女
- 125 常盤なる出雲の森やしけるらん君か齡ひの千枝に栄えて 同鷹女
- 126 杵築なる神代の跡をたつねても千代の道社君はわくらめ 真柄茂女
- 127 君か代にしけり栄行水草川末はるかにも見え渡るかな 仙田清女
- 128 古勝間のまつも色こそ増りけれ是や千年のためし成らん 吉見豊女
- 129 是そこの君か齡の長見川つきぬ流れを我もくま、し 藤江左喜女
- 130 出雲なる錦のうらをたち繼て千代の衣を君にさ、い、けん 同加年女

- 131 八雲たつ出雲の川の長らへて尽せぬ御代の行末を見よ 十二歳松林松女
- 132 出雲なる袖師の浦の友千鳥君をちよとは鳴わたるなり 中村久之
- 133 又おへる亀たの山の老松は花も十かへり咲ぬへき哉 内藤高行
- 134 打むれて稲佐の浜にゐるたつよ君をともなへ千秋五百秋 森中女
- 135 出雲山高峰の松にゐるたつも君か千年を懸て鳴らん 森永雅
- 136 万代もみにとり佩て剣山くもらぬ御代に仕へまつらせ 森時女
- 137 和多田島幾重岩ねにかゝるらん君か千年の老の年波 森為泰
- 138 おなしこゝろを 鶴山に花咲かきり亀山に月照かきりありかよひ見む
- 寄竹祝
- 1 言の葉の色を見るにもしるき哉千竹の園の千代の栄えは 古徳子
- 2 一ふしにこめたる竹の千代をへて生そふ限り君は栄えむ 綱子
- 3 千尋まで行末高くのひ立ん竹と齡を君はくらへて 敬
- 4 かけふかき軒はの竹の若みとり千代に老せぬ色をみる哉 正治

5 呉竹の直なる道を幾千代か老すかはらす君は行みむ  
真樹

6 おきふしに見るや学ひの窓の竹千代の栄えは兼てしるしも  
愛敬  
真全

7 栄え行君はそのふの竹はの□にも増る齡ならまし  
喜恵子

8 君も又直なる竹か心もて葉毎にこもる千代はかそへむ  
末子

9 ふしことに千代万代やこもるらんその竹のやをしめて君すめ  
百年

10 百年のなるものは八千代経ん君か千竹の色そ殊なる  
尚行

11 呉竹は千代にかはらぬものなれば君か栄行宿に生けん  
八重子

12 しけりそふその、千竹のよにあへて末長かれといのる此君  
鹿子

13 年毎に生そふ庭のくれ竹と君かよはひとつれ長けん  
正朝

14 八千竹のそのふし毎にこめし千代の数さへ君はよむへかりけり  
泰仲

15 百年も千年も君か常盤なる色社竹に顕はれにけれ  
建敏

16 色かへす君も栄えよ年毎に生そふ宿の竹をためしに  
増子

17 行末をわれもいはひて此君に千代を契るも嬉しかりけり  
文登子

18 朝な夕な千代のともとそ見むものは竹より外にあらしとそおもふ  
倭文字

19 ふし毎に君か八千代やこもるらん栄えて見ゆるその、呉竹  
景研

20 呉竹の深きみとりのかけに社千代をしめたる君はすみけれ  
重成

21 竹のはのひまなくしける数に社こもりてみゆれ君か八千よは  
武敏

22 す直なる心の竹を杖にして千代の坂ちも君はこえなん  
忠好

23 蔭深き千竹の園の君なれば栄行末もかきりなからん  
言正

24 おもしろきふしくらへして千代そへむ君かみその、千竹八千竹  
美生

25 かけ高くしける千竹のその色にしるきか千代をしめのうちとは  
千元

26 月花に心をよせて呉竹の千代栄行宿そ此宿  
吉雄

27 ますらをのたけき齡は弓となり矢となる竹の千代にまかせん  
吉利

28 末終にその、千竹は千里まで軒は伝ひに生しけらまし  
陣斯

29 ことし生の園の呉竹八千代へて後社君か杖にきらまし

30 友とみる心則すなほなる君社竹の千代にいまさめ  
久慶

31 幾千代もかはるふしなき呉竹の栄えを君か栄えともかな  
建真

32 むら竹にむらかる雀ちよくと君か齡をいはひてそなく  
国子  
孝郷

33 竹の葉のありのかすく声立て八千代と家の風は吹らん  
民子

34 いくみ竹千竹五百竹打靡きときはに君か立栄えなん  
今村久良子

35 かきりなくかはる事なき君かよの色をこめたる園の呉竹  
正樹

36 呉竹の千尋のかけに住君はみをはむ鳥の声も聞らん  
益雄

37 しけりあひて限りしられぬ竹のはの露の白玉千代の数かも  
正蔵

38 尽もせし千代の杜にそ君か住その、八千竹きりつくすとも  
種成

39 五十より後の齡は園の名の千竹を君かありかすにせよ  
恭義

40 我もいさ竹のみその、□むしろしきてそあはん千代の栄えに  
篤之

41 限りなく長き齡の故なれや君かしめたるやとのくれ竹  
国彦

42 八千代経む竹のそのふの君こそは松もかねての友となしつれ  
朗衡

43 とことはにそよく千竹の葉風さへ君か八千代の声立つ也  
延孝

44 家の風吹たてつへき色にこそ竹の園生はおひしけりけれ  
正息

45 君かよの長きためしに生出しかすもしられぬ園の若竹  
孝徳

46 常盤なる君かそのふの呉竹は千代もかはらぬ色に栄えむ  
常彬

47 色かへぬその、千竹は千代懸て家の栄えと共にしけらん  
豊秋

48 みそのふの竹の千本のふしことにこもるや君か八千代成らん  
元生

49 春秋に色もかはらぬみそのふの竹こそ千代の印也けれ  
年林

50 風そよく千竹の園によの人もよりてこそ聞け千代の調を  
雅純

51 かはるふしなくて千年も色かへぬ竹の齡にならへ此君  
正甫

52 君か経む千代の根さしはみ園生の竹のみとりの色にしるしも  
豊年

53 風そよく庭の竹村おのかよを君にゆつると打靡くらん  
富穎

54 行末は千代に八千よに八千本の竹のみとりの蔭に君すめ

- 55 君かよの千代の栄えは軒はなる竹の林の色にこもれり 徳教 良平
- 56 家の名におへる千竹のふしことにこもらん数をよめや此君 公敬
- 57 みそのふの君はかはらし八千代へて竹は幾たひ生かはるとも 景命
- 58 栄え筒しみたつ園の呉竹に近しけ君も千代をかさねて 忠恕
- 59 実をはまん鳥も出きて千代経へき千竹の園の君賀まつれ (ママ) 重久
- 60 蔭高くしける竹むら吹風にかねてそひく万代の声 惟雄
- 61 くれ竹のみとりの色に立よれば千代の園ともいふへかりけれ 保光
- 62 若みとりかはらぬ色を友として千代にすむへき竹の下庵 方知
- 63 千代ふへき竹の園生に住君はかしこ人ともいふへかりけり 友保
- 64 蔭高く栄行竹の下庵に千代をしめてもすめる君かな 季寛
- 65 一ふしに千代をこめたるみそのふの竹の千本の節や幾節 堀江忠教
- 66 蔭高き千本の竹のふし／＼にこもりてみゆる千代の数哉 尚章
- 67 園に生る千本の竹の蔭にすむ君社千代のあるし也けれ 当義
- 68 君か住その、千竹のふしことにこもる齡や幾千万代 吉武
- 69 ふしことに君か八千代はこもれりと栄えてたてる園の呉竹 矩豊
- 70 君かすむ軒はの竹のふしなれて宿るす、めも千代と鳴也 武昌
- 71 千代ふへき色そふ軒の竹村も君か栄えにしるしとそおもふ 一業
- 72 君かみの千よに立そふ蔭なれや色もかはらぬ窓の呉竹 寛郷
- 73 一ふしに万代こめていはふ也千竹の園の君かよはひは 勝延
- 74 名におへるその、千竹の千万世かはるふしなき君そ此君 存重
- 75 御園生の竹のちもとのふし／＼に君かそへみよ千代の吉事 素誠
- 76 若葉さす千竹のそのに千代しめて君こそ直き道教へけれ 式実
- 77 呉竹のかけをしめ筒幾千代か住へき君か栄えをそ思ふ 隣信
- 78 君か植しその、竹村おのつから千代はこもらぬ一ふしもなし 滋栄
- 79 すなほなる御代の姿に生出て八千代経へきはその、若竹

80 君か園に植置し竹の節毎にこもる齡や幾代成らむ  
義静

81 とし毎に生そはるへき呉竹の千代にいませといはふこの君  
広孝

82 年ことに生そふ竹の下庵は千代万よに栄えさらめや  
信順

83 千代やちよかはらぬ色のくれ竹や出雲のもりの君かおもかけ  
節  
竹内修智

84 ふしことに八千代をこめて栄え行竹の齡は限りしられす  
柘植正常

85 一ふしにちよをこめたる呉竹のよは数ふともかそへ尽せし  
小田柔嘉

86 かきりなきよはひも色に顕はれてみゆるは君かその、呉竹  
栄雄

87 千代こめて生たつ竹に置露は君か齡をむすふ也けり  
定方忠教

88 呉竹のかはる色なき陰にこそ千代をしめたる君は住けれ  
正信

89 くれ竹はかはる色なく栄えけり君か齡の千代のためしに  
正永

90 宿しめて移し植たる呉竹の千代の栄えも君社はみめ  
正静

91 千代の坂こゆへき君か杖にとて竹は園生に生しけるらん  
雅義

92 万代の友と栄えて呉竹の長きや君かよはひなるらん  
建業

93 竹の子のや、生そむる一ふしもやかて千ふしと成て栄えん  
智義

94 限りなくなからへてませ千本たつ竹の一葉に千代をこめ筒  
一玄

95 年毎に千本やちもと生そはる竹のそのふの君は万代  
正雄

96 千代ふへき竹の園生に宿しめて千人導け敷島の道  
正時

97 蔭高くしける軒はのいくみ竹いこもる千代は君そかそへん  
釈教好

98 君とあふき友とちきりて千万のよ、におかめむ園の竹村  
同惠俊

99 この君の千尋の影に宿しめてとはにたのしき節やみるらん  
同賢教

100 家の風吹たつ竹の林には嬉しきふしもしけく見えつ、  
同活兮

101 みそのなる竹の千もとのもとことに君か齡の数そこもれる  
同浩兮

102 草木にもあらずしける呉竹の栄えや君か栄え成らむ  
同素兮

103 限りなき君か齡は千本たつ竹のみとりのいろかはるまで  
同九鳥

104 八千本の竹の数々ふし／＼に八千代をこめて君そ栄えん

105 幾千代もかはらぬ宿の竹のはにおなしみとりの色をみる哉  
同無比

106 呉竹の千代のかけさす窓に社長き齡のふしもみえけれ  
同恵好

107 幾千代とさしてはいはし御栄えは軒はの竹の色にしられて  
宣就

108 幾千代も色をかさはさぬくれ竹のみとりや君かためし成らん  
富義

109 千代ふへき君か姿と見はやさん緑色そふ園のくれ竹  
一行

110 白露の玉をかされる竹の葉に幾よかはらぬ月は澄へき  
可忠

111 君と臣の中の心もあひ竹は幾千代かけて靡きあふへき  
敬勝

112 此君の長き齡をたへみよ千よをこめたる園の呉竹  
古一

113 長からんよはひを竹にたくらへて此君かよの千代はかそへむ  
義郷

114 此君は竹のそのふに宿しめて幾世常盤の色に栄えん  
專隣

115 幾千世もいくみたちてそ栄ゆかむ君か千本のそのくれ竹  
延宣

116 君が代の長きためしは呉竹の心直なる色にこそみれ  
敬典

師前

117 色かへぬ園の千竹のふし／＼に君か齡の千代はこもれり  
晴敏

118 千万の年をかさねて呉竹は君か久しき友と成らむ  
朝春

119 うつし植し宿の呉竹世々をへて君か御杖にさけまつらむ  
真久

120 君かすむ竹の園生のそのなにも千代の栄えはしられける哉  
計寛

121 軒のはに植て色そふ呉竹と共に千代へむ君にそあらまし  
良里

122 竹の葉にけさ置千代の露のかす嬉しきふしの涙とそみる  
伊勢女

123 君かすむその、呉竹しけりあふその枝葉にも千代はこもれる  
千代女

124 呉竹の千よかさぬへき君なれば嬉しきふしの数もつもらむ  
錠女

125 君か為うつし植たる呉竹の根さしも長き御代に栄えむ  
多喜女

126 いかはかり千竹の園もしけらまし君か齡の限りなき世に  
多可女

127 一葉にもこもるは千代の色にして竹は久しき齡成らむ  
茂女

128 千代掛て友なふ竹のふし毎にこもるや君か齡成らむ  
清女

129 す直なる君かみその、呉竹は幾千代かけて色増るへき  
清女

130 いつまでもかはらぬ色と呉竹はよのうきふしに靡かさりけり  
豊女 るらん

131 もとよりも千代をこめたる竹の杖つくとも尽ぬ齢成らん  
左喜女  
加年女

132 くれ竹はうきふししらぬ色にして栄行君か姿とそみる  
松女

133 かきりなく長らへませと此君の千代の栄えを我はいのらん  
久之

134 くれ竹のかはらぬ色を例しにて君も八千代に長らへぬへし  
高行

135 呉竹の千代のかげ道ふみならし立ならしつ、君遊はなん  
中女

136 ふし高くしける軒はの竹ならて君か齢も常盤ならなん  
永雅

137 御園生の親にひかれて竹の子も千代の栄えに逢ぬへき哉  
時女

138 長からん老か齢のためしには松江にしける竹やひかまし  
為泰

139 おなし心を  
弓にきり矢にはく竹と思へこそかくて園生に千代はしめけれ

賀会日当座詠

1 日 時となくよとなくてらす日はかりに移りかはらぬものは有けり  
美生  
言正

2 月 雲霧もさはらぬ月は天地にか、やきわたる鏡也けり

3 星 かれゆかむ時しおければ常盤なるものこそ星のはやし也けり  
吉雄  
千元

4 雲 天のはらみとりの空に追風まつけしきをみせて雲そた、よふ  
正樹

5 風 色もなくかもなきもの、吹風はあやしく人のみにそしみける  
武敏

6 海 伊勢の海や神代なからに影すみて幾よ月日の波は立らん  
吉利

7 山 動きなきみ代の例しを昔より山とはうへもいひきつる哉  
種成

8 川 いかはかり天の川せや早からし流るも星の影のよとまぬ  
千代女

9 野 行人もかへるも露ぞ分きつるあたの大野は草深くして  
陣斯

10 名所 不二のねの空にい行もは、からて雲そ麓にうき島かはら  
公敬

11 田 年ことに新はりはりて野も山も田所多くおれる御代かな  
広孝

12 田家 賤かやをめくる田つらにおりゐつる声にも君か千代はしるしも  
元生

13 山家 奥山に庵しめたれは軒はより雲社おこれあさな夕なに  
正蔵

14 剣 出雲なる簸の川かみの剣より我ひのものはしつまれりけり

15 鏡 よはひたに君につもらはます鏡老の姿はうつるともよし  
時女 豊秋

16 水 みにふるもあかもけかれも清むてふ水は尊きものにそ有ける  
義静

17 人 人とあらは神と君との御恵を思はさらめや寝ても覚ても  
保光

18 苔 奥山の岩ほの苔の露けきや雲の出入ところ成らん  
篤之

19 松 山のはにしける老木のひとつ松なか生出し昔かたらへ  
永雅

20 榊 さ、けもつ大宮人の榊葉にかゝるや神のこゝろ成らん  
国彦

21 述懐 玉くしけ二荒の山にいます神の御徳功は高くあふかさらめや  
為泰

22 神祇 日の本は神の守りに大君の御いつによりて治れるくに  
賀日不逢而詠当座代人々

賀日不逢而詠当座代人々  
建真

1 天 国の末海の果にもあまるまでおほふは天の恵み也けり  
敬

2 富士 時しくに高く尊き不二のねは仰きみ愛ぬ人もなかりき  
孝徳

3 一世 奥山に入てうきよを遁れむと思ふもやかて迷ひ也けり  
朗衡

4 心 朝なくむかふか、みのいさ清く心のちりも打はらは、や  
重成

5 旅 朝風やゆふへの雲の往来さへ心にかゝる旅のそら哉  
鷹女

6 衣 とし高き君そまとはむ紅のやしほの衣幾重かさねて  
友保

7 夢 世の中を夢とあまたに過しきぬきのふをけふの夢となし筒  
当義

8 草 君か代のちよの根さしは道のへの草にも見えて生茂りけり  
愛敬

9 巖 深山ちの岩ほの苔の花衣きつ、動かぬ御代尽さはや  
真樹

10 弓 今はよのしつめと也て武士も弓は心にひかぬ御代かな  
正朝

11 玉 君かみをてらす心の玉こそは万代ふともくもらさらまし  
恭義

12 道 中々にふみそめてこそまとはるれ果なきものは言のはの道  
景命

13 木 家をしも木もて造れりそこもへは立よるかけも尊まれつ、  
孝郷

14 火 小柴さしあすはの神に三輪すゑてまつる齋庭は御火白くたけ  
九鳥

15 土 山といひ海といへとも土ならぬかたこそなけれ天の下みな  
忠恕

16 金 火に水に入ても朽ぬ黄金こそよにたくひなき宝也けれ

17 鶴 あしたつも千代経て後におもふらむ長きを君か齡なりとは  
古徳女

倭文女

18 鶏 夜をこめて空音告れは神代にもなか鳴鳥と恨られけん

末女

19 雁 寢覚する枕の山に鳴雁夜深き月にうかれ出らむ  
(ママ)

正息

20 雀 朝毎に軒はの竹のむら雀千代と鳴音もめつらしくして

真全

21 獸 君か代の春のひかりに引れ行牛のあゆみも長閑かりけり  
そ

常彬

22 猿 人とはぬみ山の庵の木の葉猿さけふ声さへさひしかりけり

良平

23 詠史 つきの木のもとにたよりし藤波の花はよをへて栄えける  
哉

哉

正治

24 古戰場 駒入しあたりやいつこ見渡せは宇治の川風みにそしみける

延孝

25 陣中遠情 古郷を月にしのひてともすれは鎧の袖をぬらしける  
かな

かな

久良女

26 冬祝 ふる雪とともにつもれる君か代の恵は千代に尽せさらま  
し

し

益雄

27 名所山 浅間山音もと、ろにもゆる火とよにか、やかせ君か功業も

28 寄国祝 芦原の水穂の国は安国と神のさためし御代のかしこさ  
建敏  
〔付記〕本稿は、山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域  
文学・歴史関係資料の研究」(研究代表者・要木純一)による成果の一  
部である。

# Hymm in Commemoration of MORI Tameyasu's 50th Birthday

ASHIDA Kouichi

(Faculty of Law and Literature, Shimane University)

## [Abstract]

Tameyasu Mori, 1811 -1875, who was a samurai in the Matsue domain during the Edo period. Also, he is well known as a Japanese scholar of *Kokugaku*. Poets from the *Izumo kadan* (which is a poetry circle) celebrated the anniversary of his fifty years birthday and make Tankas which are Japanese style of poem. We have collected these tankas from collections of Japanese poetry, so we can understand the situation of *Izumo kadan* during those period of time.

Keywords : MORI Tameyasu, Hymm in Commemoration of 50th Birthday,  
*Izumo-Kadan in Bakumatu*